考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.172
2018.1.1
謹賀新年

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器 ― E.S.モースと坪井正五郎のはざまで ―

鈴木 正博

● 第19回 ●「コロボックル風俗考」の落し物

今日の学史という大仰な物言いによるならば、坪井正五郎の業績は斎藤忠を除いて不思議にも食わず嫌いのレッテル貼りでもされているような印象が強い。山内清男への接近と同じように坪井正五郎の人類学に謙虚な対峙姿勢で学ぶならば、**西ヶ原貝塚の考古学は「モノ」から「ヒト」へと迫る理念と方法**とを追求しており、続く**「コロボックル風俗考」は遺跡や地域等に記録された「コト」の痕跡と「ヒト」の関わりを動態的に統合する新たな学問領域**を開拓するなど、往時の文化や社会をも多面的に展望する**理論的な方法と実践的な観察を本質**とする。モースと坪井正五郎を比較するときに最も顕著な違いとして対照されるのが、列島の「ヒト」に対する飽くなき探求視点である。**モースの生物学に対し、坪井正五郎が本邦に人類学を建学**した所以からも明らかである。

今回は西ヶ原貝塚報告と「コロボックル風俗考」を関連付けながら学ぶ「**加曾利B1a式**」成立研究の一例を本格的な加曾利B式研究の前史として示し、西ヶ原貝塚報告が「コロボックル風俗考」へと昇華される具体的な追求過程を見るが、連載最後の「第十回」の挿図ではその方法により石器時代の列島における活動痕跡が「**コロボックル遺跡分布図**」として明らかにされ、後の『**日本石器時代人民遺物発見地名表**』は既に射程内となる。こうして西ヶ原貝塚報告の中断は人類学として視野を広げ発展するための中断措置であり、この過程を通して更に新たな次元へと移行する**西ヶ原貝塚発祥の形態学は、単一分類要件から複合分類要件として見事に見直され実践**されていることに気づかされる。

日本先史考古学史において山内清男を超える画期的な体系性が認められるとすれば、山内清男自身がジェラシーの虜となる坪井正五郎の頭脳を措いて他には無い。

些細な具体例ではあるが、西ヶ原貝塚の加曾利B1式突起（第22図）に戻る。「**コロボックル美術の標本たるの価値**」としたように、突起・把手を石器時代における「名状すべからず」美術とまで賞賛すべき精製表現技法と認識し、更にその「標本たるの価値」との評価に対してはこれまでの考古学成果と併せて考えるべき意味深長な内容を読み解くことが求められるが、既に本連載の第2回「**羅針盤なき航海と新たな地平**」（尚、「下沼部式」は誤記、「**沼部式**」に訂正乞う!）と第3回「**進化論の枠組みから社会論へ**」にて考古学から観た第22図の解説準備は済んでいる。

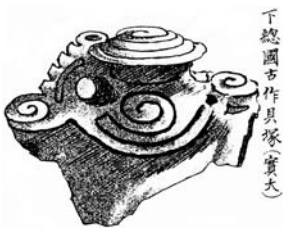
第22図は第3図「**西ヶ原貝塚の「乳頭形把手」形状分類**」の「番号一」と同じ土器であるが、図は内面側で、外面側には「加曾利B1a式」に残存する「縄形浮紋」の極めて薄手の土器である。特に「武蔵國荏原郡峯村」との類似についても「**互に似寄りたる事は誠に強いもので、決して暗合と見る事は出来ません。**」と述べており、今日の型式学的知見からはその類似度合いに関心が赴く。

果たせるかな、やや違和感のある突起・把手配置が「コロボックル風俗考　第九回」の挿図で行われ、第22図をその一部とする。第22図は挿図の最上段左端に配置され、「武蔵國荏原郡下沼部」の堀之内2式突起である第23図は、隣接させずに対極に位置する最下段右端から2番目に遠ざける。頂部の「互に似寄りたる事は誠に強い」「乳頭形」に鑑みるならば、この「下沼部」こそが「峯村」ではなかったか、とするならばこの**前言を翻す隔離的な配置関係こそが意味深長**である。

呼応するかのように近隣関係にも異変が生じている。第22図の右隣に配置された第24図は「下総國古作貝塚」の堀之内2式突起であるが、西ヶ原貝塚報告では第3図「西ヶ原貝塚の「乳頭形把手」形状分類」の「番号二」の仲間とされる。第22図の「番号一」とはそもそもの分類レベルが異なることから、「互に似寄りたる事は誠に強いもので、決して暗合と見る事は出来ません。」とした「形状」分類内の類似よりは遥かに相異が大きい分類である。然るに西ヶ原貝塚報告で類似度が高いとされた突起が挿図では遠くに配置され、分類自体が異なるとされた突起が近くに配置される事実を前に改めて想起すべきは、（未完）のままの報告中断現象である。

これを坪井正五郎の考古学が西ヶ原貝塚報告による単純な「形状」分類から、**「ヒト」による製作物としての「標本たるの価値」へと昇華**する経過と読み解くならば、**「形状」だけの静的分類から「紋様」による変化の態様をも重視する動的分類へ、という形態学の高度化**が見えてくる。畢竟、**突起の「形状」よりも突起と共に周囲に展開する「紋様」にこそ類似に基づく変遷過程が彷彿とする。**

▲第23図
下沼部遺跡の堀之内2式突起



▲第24図
古作貝塚の堀之内2式突起

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目　次

■加曾利B式土器　「コロボックル風俗考」の落し物（第19回）　鈴木正博 …1
■考古学の履歴書　ことのはじまり（第12回）　間壁忠彦・間壁葭子 …2
■リレーエッセイ　マイ・フェイバレット・サイト（第165回）　中山　圭 …3
■考古学者の書棚　『農民と耳飾り』　甲斐昭光 …4

考古学の履歴書

ことのはじまり－「‥それでは　何だ」(第12回)

間壁 忠彦・間壁 葭子

4. 石棺の石材(3)

前回のべた古墳時代石棺で、香川県産石材2種による最も古いタイプとされる割竹形・舟形石棺や、兵庫県産竜山石による長持形石棺についての具体例や詳細は、『倉敷考古館研究集報』の11号・12号(1975・11、1976・8)に報告している。その頃私たちと共に調査に当っていた、当時考古館職員であった藤田憲司氏やアルバイトの学生でもあった山本雅靖(まさのぶ)氏らも執筆に参加している。先回でその大きな流れは述べたが、当時報告した具体的な数値や検討点なども多少上げておこう。またその報告には、後期古墳期の主流である家形石棺の近畿や近江地方における、兵庫県産の竜山石製石棺と畿内を代表する二上山系の凝灰岩製石棺のあり方も加えている。この点にも多少ふれねばなるまい。

40余年昔のこれらの報告書ではあるが、割竹形・舟形石棺については、香川・鷲の山産石材製として10例。火山産石材によると考えられるもの7例。また瀬戸内一帯に運ばれている阿蘇山系石材製6例についての検討をも記載している。

阿蘇山系石材の石棺に関しては、当時、既に九州での石棺形態の研究の中で時期差も示されていた。その点に関し、私たちの石棺石材研究の発端とも成った、岡山県の小山古墳の舟形石棺形態の検討にも触れている。

長持形石棺に関しては兵庫県(播磨)産竜山石を中心としたものが殆どであった。石棺所在地は、兵庫県では播磨が中心ではあるが、但馬の出石町にも存在している。また一方では奈良・大阪・京都・岡山の各県に及び、その地では、王墓とか首長墓とか、大王墓とも黙された古墳に関係した石棺ばかりであった。推定を含む数ではあるが40例ばかりを示した。

また竜山石産地からあまりにも遠く、それぞれの地元に良質の石棺製作に適した石材を産する所での、畿内型或いはそれに準ずる形態の、長持形石棺に関しての実態も検討した。それらは京都・島根・佐賀・福岡・群馬・宮城県に渉り、10余例ばかりの検討を記している。これらは地元産の石材による製作ではあったが、例えば福岡県内(筑後)の月の岡古墳とか、群馬県内(上毛野)・伊勢崎のお富士山古墳の長持形石棺は、近畿地方の同種石棺を製作した工人の製作としか思えない、形態の類似する作りであった。また同所群馬県所在で、関東最大の前方後円墳である太田天神山古墳では、断片しか見られない石棺だったが、恐らく同様と見た。

なお岡山県で石棺石材と共に、石棺形態の示す意味を考えたさい、最も大きな示唆をあたえたのが造山古墳前方部に、露呈して置かれていた石棺であった。この古墳が吉備地方でのみの大首長墓では止まらぬと考えられる、全長360mの大前方後円墳で、近畿地方の大王墓も含め日本で第四位の巨墳であることは、周知のことであろう。私たちはこの石棺を、長持形石棺の中で説明した。もちろんこの石棺の石材が、小山古墳の石棺石材が、九州の阿蘇山系石材と知ったときと、同日に同種の石材と知った上での事である。しかもこの石棺は、長持形石棺の基本といえる6枚の石材の組合式で無く、身が刳抜の箱形で、底の短辺一方は石枕らしい段状の作りになっている。蓋と身の合せが印籠あわせである。これらの形態は長持形にはない。この石棺全体の形態は、九州の石棺作り工人の手法である。

だが注目されるのは箱形棺身の小口部分に、あたかも小口板を嵌めたかのような形に見える方形彫り込みを施し、しかもその中に方形突起まで彫り出している。古墳時代石棺を知る人であれば、典型的な長持形石棺には、小口板にこうした突起が、必ず1個か2個彫り出されていることは、常識のはず、この棺が九州の石材で、九州的石棺形態であっても、この小口の作りは無視できない。

竜山石で作られた典型的な長持形石棺にしても、この小口板にある不思議な方形突起は、何を意味するのか、単なる飾りとは言い切れない。何を意図したものか、モデルは何か、今なお明確な回答はないはずだ。それだけに長持形石棺に必要条件だったといえよう。造山古墳の前方部にあるこの石棺は、確実に造山古墳出土かどうかの疑義もあるが、無縁の地の出土ではない。しかも棺身の小口に特異な彫刻のある限り、単に九州の石棺とだけは言えない。

だが今頃は、長持形石棺の重要な特性は看過され、この石棺は、九州から運ばれた石棺とだけ説明されているのではなかろうか。吉備の特性が埋没しないで欲しい。造山古墳の築造の頃、吉備は九州や近畿勢力を共に包括していて、特異な文化を持っていたことの証明だと思っている。

また後期古墳期の家形石棺に関しては、古墳が各地で膨大に数を増すに伴って石棺に使用する石材も、各地域で新たに開発されている。むしろこうした現象が、研究者の目に付きやすかったこともあり、古代において重い石材を遠くから運ぶことより、石棺全ては近いところの石材に違いないとの思い込みを、生んだのかもしれない。

しかしその思い込みの崩れる現象は、前中期古墳の石棺石材の実態と共に、後期古墳期にも石棺石材の持つ意味が、現代人の常識通りでないことを知らされる結果となった。

次回では岡山県内の他の石棺の石材を、いま少し具体的に示す中で、私たちが古墳時代の実像を考えた経緯を記しておきたい。

間壁忠彦　略歴

1932年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954～1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973～2006年	同上館長
1968～1998年	広島大学、1968～1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982～2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006～2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁葭子　略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956～2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979～1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985～2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト165

棚底城跡 ～熊本県天草市

中山 圭

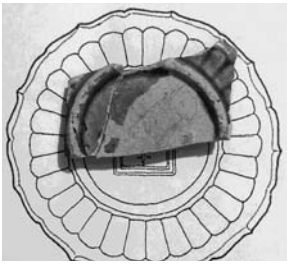
薄いコンテナに、たくさんの小さな陶磁器片が収蔵されていた。棚底城跡の発掘調査で出土したこれら遺物の再検討が私に課せられた仕事だった。陶磁器の知識はほぼ無く、当初はなんとなく「緑だからこれが青磁かな」程度の感覚で、出土した曲輪や遺構毎に分類の真似事を進めた。通販で輸入陶磁器関係の基礎文献を入手し、破片と図と比べてみる。徐々に、高台や口縁部の特徴や同じパターンの模様の磁器が多く見られることが理解でき、それが時系列に並ぶことがわかってくると、少しづつ楽しくなってきた。出土層位が薄いため、表土層一括とされた遺物の中に、中世から近現代の陶磁器までが混在しており、最初は区別できなかったこれら小片の識別ができるようになってくると、途端に戦国期段階の輸入陶磁器片が妙に光り輝くように感じた。未報告資料の中に、色絵皿等レアな陶磁器片があることもわかってきて、この作業をきっかけに輸入陶磁器の魅力に取りつかれるようになった。

棚底城跡は、熊本県天草市倉岳町に所在する戦国期の城郭である。天草上島の南岸、八代海を除く低丘陵の末端尾根に城郭遺構が残り、標高約90mの主郭から、南側へ尾根伝いに段々と曲輪を連ねる構造が特徴である。島嶼である天草地域では最大規模の城郭であるが、全国の戦国大名クラスの居城に比べれば、かなりこじんまりしたものと言っていいだろう。城は、戦国時代の天草を分割統治していた地方領主「天草五人衆」のうち、上津浦氏と栖本氏が16世紀中葉に争奪を繰返した記録があり、在地領主の支城という位置づけである。完結した島世界の城郭で、小競り合い程度の合戦が主体のため、必然、縄張りはシンプルで技巧的な防御遺構は少ない。一方で、低丘陵に立地し居館も兼ねていたため、発掘調査によって、数多くの生活具が出土している。平成14年頃から旧倉岳町教育委員会が発掘調査を開始し、列島縁辺の城郭としては珍しい茶道具類やベトナム産陶磁器の出土等で注目を集め、国指定史跡を目指すこととなった。この動きの中で、私も平成18年に職員採用され、指定に向けた各種事業を担当することになったが、発掘調査時に遺構を完掘してしまっていることが問題となり、担当後、新たな発掘調査は手掛けられなかった。それでも冒頭に述べた遺物の見直し作業により、遺物全体の中で輸入陶磁器の比率が58%にも及ぶ特徴などが分かり、また学術検討委員の先生方のご支援もあり、紆余曲折ありながらも、平成21年に国史跡として指定された。指定後、普及啓発の展開、保存管理計画の策定、史跡土地購入等の事業を進めたが、自分の手で発掘調査を手掛けてないことから、最大限の愛着を持つことができず、どこか心にモヤモヤを抱えたまま業務をしていた。

▲倉岳山頂から見た棚底城跡（白線）と八代海

「中世城郭」の遺跡としての評価は、縄張り研究という地表面観察による構造把握研究が基礎にあるため、「どれだけ高度な対人遮断性を有しているか」が基準になりがちである。城郭好きで「いい城だよね」という話をする時、概ね、横矢がかかる曲輪配置や人を寄せ付けない畝状竪堀群等、城を守る工夫を随所に持つ「攻めにくい城」であることが多い。棚底城跡は、そのような観点からすると物足りない。「この城のセールスポイントはどこだろう?」今思い返すと、常に自問自答してきたように感じる。

モヤモヤ観が晴れたのが平成28年の発掘調査だった。史跡の整備基本計画を策定する中で、主郭周辺の土塁・横堀の延長部を発掘することになった。城跡の調査としては12年振り、私にとっては初めての棚底城跡の発掘となり、ようやく棚底城と正面切って向き合えることで、単純にうれしかった。主郭西側の段下のトレンチを掘っている時、作業員さんが「なんか青かとのある」と声を上げた。中国華南系の菊花型青釉小皿の破片だった。博多遺跡や豊後府内遺跡をはじめ各地に出土例があるが、どこにでも見られる遺物ではなく、貿易拠点や戦国大名クラスの城館等に限って出土するものである。棚底城跡からもそれが出土し、しかも狭小なトレンチ調査で発見された。ようやく、棚底城跡が秘める価値を見出したような気持ちになった。やはり希少な輸入陶磁器を埋蔵し、海を越えた流通を感じさせる城郭だった。



▲出土した青釉小皿

なぜ、棚底城跡でこのような遺物が出るのか。その理由は、後背にそびえる標高682mのの倉岳から周囲の海を眺めると理解できる。天草最高峰のその山頂からは、膝下の棚底城跡とともに、八代海・有明海という九州を代表する2つの内海を一望でき、天草諸島や八代、水俣等県内の沿岸都市のみならず、長崎県島原半島や鹿児島県出水市方面まで静謐の海が見渡せるのである。戦国大名相良氏の日記によれば、16世紀中葉、拠点港として整備された八代を中心に、数多くの私的な日明貿易船の発着が確認できるが、倉岳山頂からは海を往くこれら船団の動きが手に取るように見えたはずである。棚底城は倉岳とセットとなり、海上交通を掌握する機能を有していた可能性が高く、このため、出土遺物は輸入陶磁器の比率が高く、なおかつ希少な種類の陶磁器が出土するものと考えている。決して派手な城郭ではないが、戦国時代の天草という地域の特性を明瞭に描きだしてくれる城郭であることが、今になってようやく得心でき、私にとってかけがえのない遺跡となっている。今後、発掘調査と並行して、各種整備を段階的に行っていく（史跡棚底城跡整備活用基本計画（PDF） http://www.city.amakusa.kumamoto.jp/kiji0033341/index.html）。オンリーワンの「海の城」という特性を活かし、地域住民から、全国の城郭ファンから親しまれる城郭を目指したい。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは中尾祐太さんです。

考 古学者の書棚

「農民と耳飾り」

近藤義郎／青木書店（1983）

甲斐 昭光

先日、昨年まで勤めていた縁もあって、兵庫県立考古博物館のボランティアスタッフを対象にしたセミナーの講師を引き受けました。与えられたのは「古墳時代概論」という、荷の重いお題でしたが、自分の乏しい経験を話題にするほかないと思い、中学生の時の体験から話し始めました。

── 同級生から「古墳を見に行きたいなら案内してやる」と言われ、学校の近くにあった10基程度からなる後期の群集墳を緊張しながら見に行ったのが私にとっての初めての遺跡との出会いでした。しかしながら、幅1m余りの小振りな横穴式石室に入り、こんなちっぽけな墓も古墳と呼ぶのか、と意外に思ったのが正直な感想でした。この古墳群については、昭和30年に市内の中学校の教師が生徒と一緒に測量調査をしたガリ版刷りの報告書が残されています。そこに書かれたある生徒の感想文は「ぼくは、古墳の写真やさし絵を教科書や本でよく見ていたから大体の想像はついていた。だけども実際に見るとまったく違っていた。よく本に出ている仁徳天皇陵や応神天皇陵などを頭にえがいていたので落たんしたのです」というものです。中学生の私はこれと全く同じ思いを持ちました。そして、「古墳」という言葉の持つ概念がとても広いことをぼんやりと感じました。──

セミナーの冒頭で「古墳とは何か」を語るにあたって、私のこの小さな体験を導入として紹介したあと、近藤先生の「農民と耳飾り」という短編を読みながら、古墳の被葬者層が多様であることをボランティアスタッフに理解してもらおうと考えました。その理由は、平易な文章で、専門的知識が少ない人にも理解しやすい内容だと思っただけではなく、その文章に紹介したい魅力を感じていたからです。

この短編は、1966年に発行された『考古学研究』第49号に掲載されたものですが、私がこれを読んだのは、「農民と耳飾り」を含む22の文章を収めた同名の単行本を手にした大学3年生の春のことでした。今から30年以上も前のことなのに、この短編が強烈に印象に残っていたのは、文章全体にみなぎる力強さに魅力を感じたからだと思います。冒頭において、当時の古墳時代研究を牽引する小林行雄が、鍬を肩に担いで耳環を着けている農夫とみられる人物埴輪を「絵そらごとのように思えてならない」と解釈していることを取り上げ、自身の調査経験に基づいてこれに正面から異を唱えたのです。古墳研究者の多くが「古墳は支配者の墓」という旧来からの先入観にとらわれ、後期群集墳は生産労働に従事する階層とは無縁のものだという誤った認識を持っていると述べる文章の力強さは、著者の確信に裏打ちされていたことが、単行本の「あとがき」からうかがえます。「1951年の津山市佐良山古墳群の調査以来考えてきたことが喜兵衛島の後期古墳群調査で確信を持てるようになった時に書いた一文」だったのです。

本書の章立ては以下のとおりです。

Ⅰ：「失敗と成功」、「発掘の話」、「月の輪古墳の発掘」、「楯築遺跡の発掘」

Ⅱ：「禿げ山雑考」、「埴輪の起源」、「弥生墳丘墓と前方後円墳」、「農民と耳飾り」、「原始古代の製塩」、「大昔の製鉄について」

Ⅲ：「「ブリクタージ」研究雑感」、「アイルランド、ロッホクルー墳丘墓群を調べて」、「イギリスの墳丘墓と日本の古墳」、「イギリスの発掘みてある記」、「ベオグラード国際先史学原史学会議に出席して」

Ⅳ：「大きな陵墓、小さな古墳」、「「補助学」と「先史時代」」、「朝鮮の文化財に思う」、「加曽利貝塚を思う」、「遺跡破壊の思想」

Ⅴ：「津島遺跡と武道館事件」

『農民と耳飾り』は、講演会での発表や新聞記事など、一般読者向けの文章を収録しています。著者の学説が総括的に平易に語られているだけでなく、その背後にある思想についても直接的に表現されています。同年に出版された著者の古墳研究の総括的成果である『前方後円墳の時代』や、その後に出された学術書とは毛色の違った、著者の声の聞こえるような自叙伝的な一冊です。

私は著者である近藤先生のもとで考古学を学びました。卒業時に埋蔵文化財行政に携わることになったことを報告した際には、「行政発掘は大変なのだから覚悟してやりなさい」と激励されたのを覚えています。もちろん、当時は実感を持ってその言葉を受け止めることはできませんでしたが、この度改めて本書を読み返して、いくつもの場所でふと胸を突かれるような文章に行き当たりました。「あとがき」には、「わざと行政発掘に関することは省いた」とありますが、Ⅰの「失敗と成功」、「発掘の話」の2つの文章は、発掘調査の理論を示すものです。「神経を耗りへら」して現場で諸関係を追求する姿勢や、発掘の怖さを意識することの重要性は、行政発掘にも当然共通するものです。また、Ⅳの「遺跡破壊の思想」では、風土記の丘構想に代表される、遺跡の「選択保存」は、保存と開発の調和ではなく、「押し付けがましい行政の直接の産物」であり、それは「資源としての歴史的記念物の保護」に過ぎないと表現されます。Ⅴの「津島遺跡と武道館事件」は、教育委員会が地方行政権力からの自主性を放棄し、文化財を破壊するに至ってしまう、重くて生々しい記録になっています。

学生時代、そして卒業後も先生との距離が遠かったことへの後悔からでしょうか、激励の書として手元に置いておきたいと思う一冊です。いささか古い本ですが、これから考古学を学ぶ方だけでなく、色々な形で考古学に関わっている多くの方にも再読をお勧めしたいと思います。

アルカ通信　No.172

発行日　2018年1月1日
企　画　角張淳一（故人）
発　行　考古学研究所（株）アルカ
〒384-0801　長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp